
俺のクリスマス

御劔剣次

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺のクリスマス

【Nコード】

N7754F

【作者名】

御劔剣次

【あらすじ】

ある十二月。俺は幼なじみの「詩織」から、突然の転校を告げられる。その拍子で告白をすると、すんなりとOKされて恋仲に。これが最後のクリスマスだから、最高のものにしようと、俺は奮闘する。

（前書き）

タイトル、あらすじが適当です。ごめんなさい。ですが、内容には合ってるはずですよ。ご安心を。

それは、クリスマスの近いある日のこと。とある高校の人気のない一室に野郎が七人、体育座りで車座をする。

「諸君、早速だがクリスマスが差し迫っている」

俺たちを部活終わりに召集した柿崎^{かきざき}——通称、隊長——が、突然そう言い出した。意味なんか察することはできない。

「わかるだろう、クリスマス」

それは理解できる。

「あの史上最悪のイベントが、まあ今年もやってくるのだ。町を一度振り返れば、必ず目につくカップル、カップル、カップルう!!」

ああ、なるほど、嫉ましいのか。

この友人、柿崎を隊長と呼ぶのは、この同盟軍『独り身隊』の創設者だからだ。独り身隊とは……説明はいらないだろう。

「隊長！ 懇談会を所望致します！」

懇談会とは、簡単に言えば慰安会だ。未成年飲酒黙認の寂れた居酒屋でメリークリスマスならぬ野郎クリスマスを過ごす会。酒を浴びるように飲みながら、「目から出るのは酒だ、酒なんだ！」と喚き散らす会。それが懇談会の実態だ。

「よし、金沢隊員、受理しよう！」

隊長の言葉に、発言者含む五人の隊員が歓声をあげた。が、ただ一人、俺だけは、非常に気まずい思いをする。

「あー、わりい……」

一言そう発すると、全員が一斉に黙り、こちらを見つめる。驚愕と、裏切りへの牽制としての冷たい目が非常に痛い。

「クリスマスは予定入っててさ、その、行け」

「バイトか?! 定期通院か?! 歯医者か?! まさか、我々へ

の裏切り行為ではなかるうな？！ いかな理由であろうとも外せ！
懇談会は全員参加でなければ意味はないんだぞ！？」

話の途中だよ、遮んなよ。

「家族が一緒に夕食に行くって言っただよ」

家族。それはとてつもなく強力な一言となつて隊長の口を閉じさせる。この独り身隊は、独り身仲間を大切にすることと家族を大切にすることを信条としている。故に、家族サービスのため、と言えば、隊長といえども強制はできなくなる。

しかし、この家族との夕食は、家族サービスだけではないので、身内を裏切る罪悪感にほんの少々心を痛める。元々無理矢理参加させられたものだから、それほどではないが。

「ま、まあ、家族とならしょうがないな、うむ」

隊長以下全員、非常に残念そうな顔で俯く。

「まあ、そういうことで。じゃ、今日はもう帰るわ」

居づらくなつたその場を逃げるように特別教室の戸を開き、立ち去る。後ろからは立ち直つた独り身隊の、二十五日の予定を決める元気な声が聞こえてきた。窓の外はもう、真っ暗だった。

玄関に行くと、肩に袋とカバンを下げた人影が丁度外に出ようとしてるところだった。腐るほど見てきた後ろ姿に、とりあえず声をかける。

「お、しおりん様は今ご帰宅でぼがつ！？」

いきなりカバンを投げ付けられた。教科書の固さが痛い。

「その呼び方止めろつつってんだろ！」

この物騒な人物は、生まれた病院で出会つて以来の幼なじみ、泉いずみ詩織しおり。部員二人のみの女子柔道部の部員だ。

「カバンを投げるなカバンを！ どうせならそっちの、お前の汗がしみ込んだ胴着の入つた袋を投げぶつ！？」

靴を投げられました。鼻血が垂れてくる。

「死ね変態！」

今投げた上靴の臭い嗅いでいい？　なんて口にしたらもう片方が飛んでくるので止めておく。実行したら床に頭から投げ落とされるだろうな。

これくらいのやり取りは、まあ、普通だ。周りの人間からは、美少女に付き纏う変態、という間柄で通っている。片思いに見えるらしく、『可哀想なお前は仲間だ！』と独り身隊に強制加入させられたという経緯もある。

今の説明でも言ったが、そう、しおりん様は美少女なのだ。

「まあ、帰るか」

「あ、ああ……」

俺の鼻血を見た詩織は、気まずそうにうなずいた。怪我させたことに後ろめたさがあるらしい。いつものことながら、後ろめたさを感じるなら最初から投げなきゃいいのに。

帰宅路、無言の二人。いつものことながら、今日は少しだけ違う。いかんせん空気が悪い。なんだ、俺の鼻血はそんなに後味が悪いのか。

「……なんだよ、俺が鼻血出したのそんなに気にしてんのか？」

「あ、いや……悪かった……」

聞いてみたら、謝られた。いつも強気なくせに、自分に過失があったらしおらしくなるしおりん様。くうく、萌える！

「この鼻血はだな、いつもしおりん様がお履きになっている上靴の臭いを嗅げたからだぎっ？！」

カバンによるアップパーカット。危うく舌を噛み切るところだった。危ない危ない。

「馬鹿！　死ね！　変態！」

「罵られるの気持ちいいっ！」

言ったら気持ち悪いものを見る顔をして黙った。いやあ、もつと

言って欲しかったのに。擬似ツンデレをもっと楽しんでいたかった。こいつとは腐れ縁で幼なじみで親密な仲だが、お互いに親友であると認識している。『男女間での深い友情は愛情になる』とは言われたが、俺たちは友情止まりだ。それ以上行く気もないし。

小学生のときに俺が『好きだ！ 付き合って！』って告白したら、右ストレートと共に『気持ち悪いこと言うな！』と言われた経験がある。世間的にはツンデレなのだろうが、当時も今もデレはない。

「クリスマス、近いな」

「は？」

突然呟いた俺の言葉に、疑問符を浮かべる詩織。いや、お前に返事を求めたわけじゃなかったんだ。

「いや、近いなと思って。今年はどこに行くんだろうな」

「ああ。どつかのホテルじゃない？」

今年のクリスマスの行き先を、詩織に尋ねる。そして返ってくる。実は、俺たちの両親は仲がいい。家族みたいなものだ。俺の母親が、詩織の父親の元カノだったらしい。俺の生まれた病院で偶然再開し、話し合ったら仲良くなったそう。俺の父親と詩織の母親は不倫を心配したが、今のところはなさそう。いや、俺としてもあつてほしくない。

以来、家族ぐるみの付き合いなんだそう。家も隣同士だし。

「ああ、こんだけの好条件が揃ってるのに、なんで恋仲じゃないんだろ」

「そりゃあ、お前が変態だからだろ。お前がもう少しまともだったら、あたしだって惚れてただろうね」

なるほど。今日ほど変態になってしまった日を悔やんだことはない。

「詩織、好きだ。付き合ってほしい」

「嫌。死ねば？」

五十二回目の挑戦に、見事破れた。ツンデレなら顔を赤く染めて

言うものだが、呆れた顔で言いやがる。第二回目からそうだった。

「いつになったらこの俺の思いはしおりん様に届くんだろうな」

「二回死んだらじゃない？」

なぜいつも死ね死ね言ってくるんでしょうか、この子は。どうせ

俺が死んだら悲しむくせに。

「じゃあ死んでみるか」

「やってみれば？」

ガードレール乗り越えて躊躇なく飛ぼうとしたら、掴まれて引き戻された。

「ば、馬鹿！ 何やってんだ馬鹿！」

「いや、死のうかと思って」

素面でそう答えたら、詩織は泣きそうな顔をした。

「な、なんで泣いてんだよ」

「バカ！ 本気にすんなよバカ……」

ほら、やっぱり自分が悲しむじゃねえか。さて、泣き止んでもらうためにネタバラシするか。

「いや、そこ飛び降りても死なねえよ？」

「？」

「だって、下、マットがいくつか積んであるし」

下調べは万全だ。いや、この為のじゃないよ。なんのって、そりゃあ……いろいろ、さ。

「……そう、なの？」

「ん、ああ」

途端に殴られた。おでこにきつい右ストレート。

「馬鹿、馬鹿！ 死んじゃえー！」

そう叫んで走り去っていく。いやあ、やりすぎだな。かなりの罪悪感とともに起き上がり、ガードレールに寄りかかる。ふと下を見た。

「……」

背筋が凍った。マットは撤去されてた。さすがに足から落ちれば

死なない高さだが、重症は間違い無かっただろう。

「……こいつは、黙ってないとまずいな」

この事実を知ったら、心が弱いあいつだ。自分が止めなかったらどうするとか泣き喚きながら、半日は説教された後ひたすら泣かれるだろうな。気まずすぎるぜそれは。

俺のために助けてくれたことと泣いてくれたことに嬉しさを感じ、泣かせたことに罪悪感を感じながら、俺は帰宅する。

十二月二十四日。世間でいうイブの日。今日は終業式がある。

正直めんどくさい。学校さばろうかなとも思うが、詩織に会いたいのために今日もゆく。

「そうそう、明日だけれども、雅第一ホテルに行くことになったわよ」

半分寝ながらピザトーストをかじっている俺に、母親が告げる。

「あー、あそこか。ゲーセン広いのとバイキングの品が多いのがいいよね。風呂ちよい狭いけど」

俺の素直な感想。俺的ミシランでは星三つのホテルだ。風呂が狭いのだって、他と比べればはある。気にはならない。

「そうよねー。それにホテル自体も綺麗だしね」

母親もどうやら星三つの模様。明日がとても楽しみになってきた。「ごちー」

パンの屑だらけの食器を母親に渡し、洗面台に向かう。

身だしなみには気を遣っている。不潔感を相手に与えない。詩織の気を引こうと躍起になっていた小学生からの習慣だ。歯は並び良く白さを保ち、肌はツルツル。髪もツヤツヤに。

俺のルックスは並。ただ肌や髪の艶は女子に羨ましがられるほどだ。独り身隊のやつらにも、これでモテないのは世界の七不思議だと誉められた。モテない原因は変態だからだろうが。

制服をばつちり着こなし、カバンを肩に提げ、靴を履く。

「んじゃ、いつてきまーす」

「はい」

毎朝のやり取りをして。ドアを開ける。

「あ」

「ん？」

開けたら丁度、詩織がいた。別に相手は待ってくれてるわけじゃないので、朝一緒になるのは稀だ。月に一回あるかないかだ。

「よ、おはよー」

「あ……うん」

気まずくうなずく詩織。あー、やっぱり昨日のこと気にしてるのか。

「……昨日は本当にごめん！」

「え？」

素直に謝ったら凄く不思議そうな顔をされた。そりゃそうだ、普段の俺なら素直に謝りはしない。だけれども、謝りたい時だって俺にもある。

「昨日は悪ふざけが過ぎた。悪かったと思ってる。本当にごめんっ！」

膝を付き、頭を地面に着ける。所謂土下座だ。

「え、あ……いいよ、もう。許す」

「ん……ごめん、ありがとう」

俺たちらしくないしんみりムードになったが、仕方ない。俺が悪い。

そうして俺たちは一緒に登校することになったが、なんか居心地悪い。独り身隊の一人に出会ってしまい、一緒に歩いているところを揶揄されるかと思っただが、この雰囲気は何か言えるものじゃないと悟ったらしい。逃げるように走って言った。

並んだまま、靴を履き替え、教室に向かう。気まずい。そのうち教室にたどり着く。

「じゃ」

「あ」

詩織とはクラスは別だ。片手を上げて言うと、詩織ははっとこちらを向く。

「……」

無言で顔を反らし、教室に入っていた。うーん、マジで気まずい。俺もとりあえず教室に入る。

「みんなのアイドル、泉詩織と何があったあああ!？」

柿崎、もとい隊長がいきなり胸ぐらをつかんできた。正直顔が怖い。

「昨日、帰り一緒になった時、悪ふざけが過ぎて怒らせちゃったんだよ」

隠すほどのことでもないし、正直に話す。

「か、帰りが一緒に登校も一緒だったとは！ 貴様らやはり付き合ってるのか?! そうなのか?!」

「いや、それは無」

「クリスマスも二人で過ごすんだろ!? そうなのか!？」

「いや、だから家族と外」

「くそ！ 貴様裏切ったな！ 俺たち独り身隊を裏切っ」

とりあえずボディブロー。かがんだところに脳天割り。

「話を聞くんた隊長お！ 昨日も今日もたまたま一緒になったただけだ！ それに、昨日付き合ってくれと五十二回目の告白をしたが『死ぬ』と言われたんですよ！ 付き合ってるはずがありません！」

殴られたことによりいくらかかりか冷静になった隊長は、ゆつくりと立ち上がり、俺の肩に手を置いた。

「ちくしょおおお！ 我らがアイドル泉詩織と付き合ってるとはあ！ 裏切り者、裏切り者おおお！」

前言撤回。完全に狂気に取りつかれていました。

結局隊長は、他の隊員達によって取り押さえられ、保健室へと運ばれていった。冷静な隊員達は俺の言葉を信じてくれた。ありがた

い。

ぽん、と、肩を叩かれた。振り返ると金沢がいた。

「すまない。実は、柿崎が好きだった赤石^{あかいし}が、三年生に告られて付き合い始めたんだよ」

なるほど。

「柿崎の家に電話して、迎えに来てもらうことにする。明日になれば立ち直ってるはずさ」

「そうか」

金沢は笑顔で言うが、柿崎のことを案じているようで、少し不安そうだ。しかしあの柿崎のことだ、明日には酒と涙で野郎クリスマスを楽しむだろうな。ここでチャイムになる。

「おっと、鳴ったな」

皆が皆、席へと急ぐ。

終業式も終わり、下校時間。隊長の居ない教室は、隊長抜いたくらいじゃ静かにはならなかった。隊員達だけは、隊長の心配で妙に静かだったが。

帰り支度も整ったし、帰るとするかな。廊下に出て一步。

「あ……おい」

「ん？」

呼び止められた。呼び止めたのは意外や意外、あの詩織だ。

「今日、一緒に帰れるか？」

「ああ、構わないぜ。しおりん様の上質な上靴の臭いとか嗅いでいいなら、な……」

言ってる途中で身構えたが、最後まで言えてしまった。おかしい、おかしすぎる。いつもならカバンなり鉄拳なりミドルキックなりが飛んでくるはずなんだが。

「……じゃ、帰るか」

「……うん」

妙にしおらしすぎる詩織。なんか変態する気が失せた俺は、帰ることを促した。このやり取りを独り身隊のやつらに見られていたら、確実に裏切り者の烙印を押されていただろう。裏切り者と彫られたハンコを額に。

いつもの帰宅路を行こうとしたら、詩織は別の道を行こうと言う。はてさて、何があるのかと気になったが、とりあえず付いていった。「なあ、何かあるのか？」

「……」

「まさか、果たし合いとか？」

「……」

「もしや人気のないところで告白か？」

「ピタリ。詩織は足を止めた。まさか、マジでか？！」

「……あの、さ」

「な、なんだよ」

「やべえ、緊張してきた。これは想定外だ。まさか告白がくるとは。深呼吸して、いつでも返事が出来るようにしておかなくては。」

「あたしね」

「お、おう」

「来るぞ、いよいよ来るぞ……！」

「転校、することになった」

「そうか……え？」

「俺の、聞き間違いか？ 今、なんて……？」

「転校、するの。お父さんが東京のほうに転勤になって。昨日、『東京に栄転だ』って、うれしそうに」

「……そんな馬鹿な。」

「ごめん、俺耳悪くなつたみたいだ」

「転校するんだってば」

「……嘘だ。」

「あつれー？ 今日って四月だったっけ？」

「嘘じゃないよ」

「……そんなはずが……」

「あ、そうか。昨日驚かせたから、その仕返しに」

「本当なんだってば！」

気付けば、詩織は泣きそうな顔をしている。それを見てやっと自覚した。ああ、本当なんだな。

「……で、いつなんだよ」

正直、このままぶっ倒れるんじゃないかと思う中、冷静になれと必死になって意識を保つ。

「一月。始業式の次の日」

そんなに近いのか。

「なあ、なんでこんなところに連れてきたんだ？ 別に学校でもいいだろ」

当然浮かんだ疑問。

「……みんなに、言えなかった」

……詩織は、力は強いのに、普段は強気なのに、こういう時には心が弱くなる。みんなの悲しむ顔が嫌で言えなかったんだろうな。

「じゃあ……なんで俺には？」

一番悲しむって知ってるくせに。

「……知ってて欲しかったから」

「……なんで」

それを聞くと、詩織は黙った。妙な沈黙。俺の心はその沈黙の重さに、次第に潰されていく。

「……わかんない」

返って来たのは、その一言だけだった。

その後、俺たちは全くの無言で帰宅した。別れ際の挨拶すらなかった。

「お帰りなさい。ねえ、詩織ちゃんから聞いた？ 詩織ちゃんね……」

……」

「もう聞いた！ もういい！」

かなりむしゃくしゃしてた。母親の言葉に、何かが溢れだしそうになった。必死に堪えながら、自室に駆け上がる。部屋に入ったら、制服を脱ぐのがもどかしくて、そのままの格好でベッドに潜り込んだ。暴れだしたかったが、その後始末が出来そうにないので、枕力バーを引き裂くだけに止めた。

涙がとめどなく溢れる。どうしようもない感情の流れが、どうしようもない方向に向かうのがわかる。

どのくらいそうしていたのかは忘れた。気付けば外は真っ暗で、枕力バーは布切れになって、湿っぱかった。

とりあえず、制服を着替えようと思った。脱ぐときに気が付いたが、ワイシャツと制服のボタンがいくつか取れていた。が、気にする余裕はなかった。なにも考えられなくなって、頭が真っ白になっている。

なんとかジャージに着替え終える。気分はすぐれない。破壊衝動も一回転して虚空となっている。目がかゆい。腹が減った。

ぼーっとする頭で、なんとなく考えた。詩織は遠くにいく。もう、いつも隣にいるはずの詩織はいなくなる。それはとてつもなく駄目な気がした。詩織が隣にいるということは、俺の人生の全てな気がした。

なんの気力も湧かなくて、俺は窓を開けた。少し先には詩織の家の壁、窓。その窓は詩織の部屋、なんて、そこまで都合は良くない。あそこは物置部屋だ。

窓の下には屋根がある。そこにあがってみる。外の空気は凍てつくようで、とても寒さを感じた。屋根の下を覗いてみる。高さは五メートルくらいだろうか。頭からいけばもしくは――

「何、してんの？」

聞こえた声にはっとして、顔をあげると、物置部屋の窓から詩織

が顔を出している。

「いや、死のうかなと思って」

「……」

「いや、嘘」

なんか、死ぬとか言っちゃいけない気がした。本当は死のうとしてたけど。

「……ごめん」

謝られた。

「……なんでさ」

なんでか聞いた。

「だって……」

詩織は、そこから先は言わなかった。言えないのかもしれない。それからまた、あの沈黙が訪れた。俺はそれが嫌で、何か話題を絞りだそうとした。

「……明日、だな」

「……ん、そだね」

説明しなくても通じた。これはチャンスだと思い、なんとか繋げようと努力する。

「最後の一大イベントってやつだな、俺たちの」

「ん……」

今言わないと、なんか、一生後悔するかもしれない。五十三回目の言葉。

「好きだ。小学生の時から変わらない。ずっとお前のことが好きだ」

「……知ってる」

フツと、詩織は笑った。おいおい、そりゃないぜ。こちらら最後の告白なんだぜ？

「……あたしも好きだよ」

「そっか、やっぱな……。……。……。え？」

あー、ちよつと待った。

「ごめん、今日の俺は耳が遠いみたいで」

「好き。……もう、言わせないでね」

真っ赤にしなからほえんだ詩織の顔は、凄く可愛くて……。

「マジ、か？」

なんだよこいつ、やっぱりツンデレだったのかよと思って。

「ごめんね、今まで」

思いは通じてたなんて知ったから。

「詩織いゝ！」

「えう?!」

俺は――跳んだ。やばい、距離的に。

「つらあ!!」

なんとか窓枠に掴まる。危ねえ危ねえ、マジに落ちるところだったぜ。

「ちよ、なにやってんの馬鹿!」

急いで引つ張り上げてくれる詩織。いまさただけどやつぱすげー力だ。

「いやー、飛んでみようかと」

「意味わかんない!？」

引き上げてもらい、窓枠に足をかけた。が、足が滑った。いや、半分わざとで。で、足が滑ってバランスが悪い上に引つ張られてるとなると……。

「うわわ!」

「あ、ちよ、きゃあ!」

ドサツと中に落ちるわけだ。幸い、俺はなんとか詩織の上に落ちるだけは避けた。詩織は得意の受け身で難を逃れる。

なんかよくわからないけれど、可笑しさがこみあげてくる。くっくと笑いをこぼすと、詩織も釣られる。思わず二人で笑った。空きっ腹に響いたが、それほど気にしない。とにかく笑った。涙が出そうになったのは、詩織には秘密だ。

それから、詩織の家族におじゃましますと言い、ご飯をご馳走に

なることになった。その胸を母親に電話すると、いつそつちに行つたと聞かれてしまった。なんて言えいいのかからず、とりあえず苦笑いしてばかした。後で適当に言い訳しよう。

で、食卓についた。何故か詩織の隣に。

「おばさん、なにゆえ詩織の隣！？ 思春期ボーイをからかいますか？！」

「あら、そこしか空いてないのよ」

どの口がそれを言うか。テーブルのサイドのあの空きは何なんだ。

「それとも詩織の隣は嫌かしら？」

「あたしは構わないけど？」

「ぐう……」

なんだ、俺の器を量ろうつてか？ 据え膳食わぬはなんとやらってか？

「……いただきます」

観念する。

味噌汁持った手に接触事故やおかず争奪戦など、いろいろとハプニングはあったが、楽しくておいしい晩ご飯になった。久々に食べたおばさんの料理は、とてもおいしかった。

「ご馳走様」

「はい、お粗末様でした」

ご馳走様の後、食器を片付けようとしたら詩織に奪われた。詩織が言うには、「客は働くな」だそう。うん、じゃあ遠慮なく任せろ。

「それじゃあ、そろそろ帰りますか」

「あら、もう帰っちゃうの？ もう少しゆっくりしていったら？」

おばさんが手にケーキの箱を携えて尋ねてくる。非常に魅惑的な誘惑だが、今日はやらなきゃならないことがある。

「いや、明日の準備をしなきゃなんで」

「あら、そう。残念ね」

こうして、母娘に見送られて俺は家に帰宅する。

家の玄関を開けて、ただいまと叫んですぐに自分の部屋に行く。
そして、今や飴色となった革財布を手にとり、階段を落ちるように降りる。何かと様子見に来た母親にいつてきますを言い渡し、制止の声を振り切って外へと駆け出していく。目指すは商店街。
「はあ、パソコンのために貯めた金なんだけどな」
まあ、そんなことは些細なものだ。欠けらも後悔なく、俺は目的地まで走る。

翌日、二十五日。世間でいうクリスマス。朝五時といえば、まだ日も上らない時間である。鳥の声もまばらだ。

「母さん、俺はもう準備できてるよ。まだー？」

「まってよ、まだお化粧終わってないんだから」

俺は着替えの入ったキャリーバックを二つ引く。片方は母親の荷物で、もう片方は父親の荷物だ。俺の荷物は背中に背負ったリュックに詰められている。

外から車のエンジン音が聞こえた。

「はい、終わったよー」

「おっそ……」

呆れる俺に微笑みを投げ掛け、靴を履いて外に出る。

あ、おい、荷物は俺に預けっぱなしだよ。

仕方なく、キャリーバック両手に足だけで靴を履き、閉まりかけの扉に体当たりしてこじ開け外に出る。

「やっときた。遅ーい」

肩提げの旅行カバンを提げた詩織が不満を顔に言う。

「へーへー申し訳ありませんしおりん様」

あっかんべーもついでにしてやると、チョップを食らった。ひたがいたひ……。

「早く乗れー。出発するぞー」

くそ、父親はどうやら俺を手伝う気はないらしい。つか、息子に

全部押しつけるとかありえなくね？ 母親の荷物なんか、一泊二日だけののにやけに重いし。

「それじゃ、ホテルでね」

「んー、おう」

去ってゆくしおりん様。……ん、そっぴやなんか態度が妙に可愛かったな。……これが好き合うってことか？

急に嬉しくなって元気になった俺は、キャリアバックの重さもなんのその。凄い早さでトランクに詰め込む。俺のリュックは自分で持つ。いや、だって中にP。P入ってるし。暇潰しに、ねえ。

「それじゃあ、行くぞー」

俺が乗り込んだことを確認した父親は、車を発進させる。スマートフォンさなんか期待してはいけない。父親は基本急発進急停車だ。危険極まりない。

車が発進し、後方に詩織んちの車が続くのを確認した俺は、リュックからP。Pを取り出す。さてやるかと思つた時に、携帯が着信を告げる。誰だと確認すると、詩織からだつた。

『今日は雅に行くんでしょ？ きれいでいいところだよね』

俺は驚愕した。普通の女の子の文面でメールが来たのは、今日が初めてだからだ。告白以前の詩織なら、『今日雅。いいとこだ』とか恐ろしく短絡的かつ少女らしくない文面だつた。やはり、これが好き合うと言うことなのだろう。

車内にもかかわらず、踊りだしてしまいそうになるのを抑え、メールの返信を行う。

結局、P。Pの出番は終始なかった。出発から到着まで、今までしなかったようなやりとりをメールでしたからだ。気が付けば、受信ボックスの四分の一以上が詩織からのメールで埋まった。こんなにやりとりをしたのも初めてだ。

二時間ほど掛けて、雅第一ホテルに到着した。下車一番、俺は体

を伸ばしながら軽く叫ぶのだ。

「着いたー！」

これを言わないと着いた気がしない。他の客がこちらをチラ見してくるが知ったこっちゃ無い。

軽く体を慣らしていると、いつの間にか詩織が近くにいた。

「何してんの、行かないの？」

「ああ、行くよ」

こいつめ、わざわざ呼びにくるなんて、そんなに俺のそばに居たいのか？ くう、うれしいぜ！

俺は幸せを噛み締めながら、詩織と一緒にホテルに入っていく。

この表現、なんかアレだな。

「相変わらずきれいだね、ここ」

「むしろ汚いホテルのほうが珍しいだろ」

宿泊施設が汚れてるなんて、客が引くぞ。そこはもう終わりだぞ。

「違うって！ 装飾とか！」

ああ、そっちか。まあ、確かに芸術性は高いかもな。

よし、ここで格好よく一言。

「しおりん、おまえのほうが、きれいだよっ！？」

が、顔面チョップを食らうとは、予想外だった。

「んなこつぱずかしいことを人前で言うな！」

ああ、人前じゃなかったらいいのか。

本当、変わったな、詩織。いや、本来の姿になっただけなのか。

真っ赤になつて吠える詩織を、俺は温かい微笑みで見つめる。それに気が付いた詩織も、赤い顔で微笑み返してきた。

今日が最後のイベントなら、俺は今日という日を盛大にすることにする。そのための下準備までしたんだ。

あ、初詣もあるのか。まあ、今はクリスマスだっ！

チェックインを済ませ、部屋で一通りゴロゴロした後、廊下に出

て詩織を待つ。待つこと三十分。詩織たちの部屋のドアが開き、詩織が出てくる。浴衣で。

やっべー、可愛いすぎる……犯罪だ……。と見つめていると、詩織がこちらに気が付いた。顔を赤らめている。

「ちよっ、そんなに見つめんなよ！……」

すねたように口を尖らせ、体を両手で隠すようにして斜めに傾ける。

仕草可愛！ 言動可愛！ 俺限界！

「しおりーん！」

「てえい！」

抱きつこうと伸ばした手を掴まれて、胸ぐらも掴まれて、見事な背負い投げ。素人な俺は当然受け身なんか取れなくて。

「がつふっ！？」

「あ、ごめん。変態には容赦するなって先生とお母さんに言われているから」

じゃ、今のは結構本気なのか。試合なら一本入っただろうな。呼吸が出来ない。

「かつ、はっ！ し、おり……」

「何？」

しゃべれない。待ったのサインを出し、呼吸を整え、立ち上がる。

「ゲーセンいくぞゲーセン！」

「……は？」

呆れて冷たい眼をくれる詩織の手を引っ掴み、強引に引いていく。最初はやめるだの、ころぶから放せだの言ってたが、しばらくしたらおとなしくなった。それどころか、俺の手を握り返し、顔を少々赤らめながら横に並んで歩く。

神様、俺、今、幸せです。神なんざ信じちゃいないが。

「よっし、次あれやろー！」

「ん、おっけー！」

しばらくゲーセンで遊ぶと、詩織も調子に乗ってきたようだ。むしろこつちが引つ張られる。

UFOキャッチャーでは、あれとってこれとってと。結局一つ二つしか取れずに俺が落ち込んで詩織に慰められたが。

シューティングゲームでは、俺が足を引つ張る引つ張る。情けなくて涙が出て、詩織に慰められた。

レースゲームでは全戦全敗。対戦ゲームも全敗。格ゲーすら全敗。「し、しおりん様はゲームもお強い。遊武両道とは……」

「まあね〜」

はあ、本当なら、UFOキャッチャーで景品取りまくりで『わー、ありがとー!』とか抱きつかれ、シューティングゲームではバンバン撃ちまくりで『わー、すごーい!』と喜ばれ……。そんな夢を現実には受け入れなかったか。

「えーと、ドンマイ!」

仕舞いには慰められる始末。一大イベントに格好いいところを見せられなかった悔しさが、俺に滝の涙を流させる。るるる。

「……つと、もう十二時か」

腕時計を確認。俺がしているのは女性物だが、そのほうが俺の細い腕には合う。独り身隊の連中には『オカマだったのか』とか変な目で見られたが。断じて違うからな。

「そうだねー。お昼はお母さん達が予約したレストランに行くんでしょ?」

「じゃ、いったん部屋に戻りますか」

泣いた所為か腹も減った。俺たちは両親の元へと引き上げる。

さて、昼飯を終えた後の計画でも立てておこうかな。

「おいしかったねー」

まだ言うかしおりん様。食事中も散々言ってたではないか、母親達と共に。我々男組は舌鼓を打つだけだったのに。一口食べては美

美味しい美味しいと……。

まあ、確かに美味しかったし、美味しそうに食べる詩織の表情と
いったらもう……。おかげで、さっきの料理の味なんか覚えてない
ぜ。美味しかったのは確かだ。

「さて、満腹になったところでさ、街に行かない？」

俺の計画第二段は、『街でデート作戦』だ。シンプルかつ王道な
ラブラブ作戦だ。ホテルの外の街のことはよく知らんが、それなり
の店やスポットはあるだろう。

「そうだね、いいかも」

「んじゃ、着替えてこいよ。ホテルの浴衣で行くわけにもいかん
だろ」

そうだね、と一言言つと、詩織は部屋へと走ってむかった。いや
あ、走るとき、あのスリットから覗く素足が……。詩織はそれに気
付いてないし。うーん、眼福。

「お待たせー」

ロビーで待つ事四十分。時間掛けすぎだろという言葉は飲み込
んだ。現れた詩織は、来たときとはまた違った服を着ている。

「それじゃー行きますか。腕組むのがいい？ それとも手でも繋ぐ
？」

「えー、恥ずかしいからヤッ」

恥ずかしいって、さっき繋いでたやん。まあ、いいや。とりあえ
ず行こう。

街に来てみると、案外いろいろな店が立ち並んでいた。あれやこ
れやと二人で見えてまわり、最初に入った店はアクセサリーショップ。
「ねえ、これとかどう？」

鳥の形をしたネックレスをうれしそうに見せてくる。これを着け
た詩織を想像する。……うーん、微妙。

「そういう派手目なのは、やっぱりロングヘアーかセミロングの人

が似合うよな」

「遠回しに似合わないって言ってるのか」

そんな不機嫌な顔されても……。

「無理に似合うって言ってもらって、似合わないものを着けるのか？」

「うーん、そうね」

案外簡単に引いたな。実は似合わないって自覚してるんじゃない？
もしかすると、詩織はおしゃれを諦めてたりするのか？ 部活の
関係上、髪はそれほど伸ばせないわけだし。それは勿体ない、元が
良い分余計に。

よっし、俺がここで一肌脱ぐか。いや、昨日の時点でもう脱いで
るけど。

「じゃ、似合いそうなのを俺が選んでやるよ」

「本当に？ じゃあ、お願いしよっかな？」

かつこつけて言ってみると、うれしそうに言う詩織。ああああ、
可愛すぎる。

とは言ってもなー、実際、俺にはファッションセンスなんか欠片
もないしな。しかし、詩織に合いそうなものなら、探せる気がする。
ネックレスの棚を熱心に見回す。アレもダメコレもダメと探して
いると、ピンと来たものを見つけた。すぐに手に取り詩織に見せる。
「これとか合いそうじゃないか？」

「これ？」

詩織に見せたこれは、真珠色の玉に金色の金具で装飾した、小さ
くてすっきりしたデザインのネックレス。

選考の基準は、俺が詩織に着けてほしいもの、です。

「こういう控え目なデザインが、詩織には合うと思う」

「そ、そうかな？」

どうぞどうぞと勧めると、詩織は恐る恐る手に取り、首に装着す
る。見た感想は、俺的には似合っていると思う。似合いすぎてそれ
はもつ……詩織可愛！

「お似合いですよ、お客様」

豚に真珠でもそう言う店員の言葉を、普段俺は信じない。しかし今日ばかりはうなずいてしまう。

「そうかな」

えへへーと照れ笑いする詩織。眩しい、可愛すぎる……。

そしてふとそのネックレスの値段を見、思わずむせる。

「ど、どうしたの?!」

「げっほ、じゅ、十八万!？」

まさか、金色の金具はマジで金なのか。真珠色の玉は天然真珠なのか。うーん、予算の三倍とは恐れ入る。つか、高すぎるだろ、これ……。

「ごめん、詩織……」

「いや、いいよ、気にしないで」

店を出ても落ち込んでいる俺。詩織は目一杯気を遣っているようだ。いやあ、今日は失敗ばかりだな。ははは……。

その後、洋服店に行ったり、カフェに寄ったり、また別のアクセサリーショップに行ったりと、総額四万ちょいのショッピングは終わった。いやー、財布が薄くなったよ、ははは。

日も沈んで暗い五時。公園のベンチに腰掛けるカップル一組。

「ごめんね、こんなに買わせて」

「気にすんなって。女の子へのプレゼントは男の野望の一つだから」
独り身隊の格言より引用。

「それよりさ、この後どつかで夕食にしようぜー」

「え、ホテルのバイキングは？」

ピザはーグラタンはー、と子供みたいな不満をもらす。く、ムードの欠片もありやしねえ。

「二人だけで食べたいんだよ。ダメか？」

「え……、ま、まあ、いいよ」

一言決めると、詩織は赤くなってそっぽを向く。うわあ、俺にやけそう。

「とは言っても、質も量も劣るファミレスになっちゃうけどねー」
これ、悲しいけど現実なのよね。さて、詩織はどっちをとるか。
「別に、いいよ」

こっちを見て微笑む詩織。この距離なら決まる！

「しーおりーん！」

「てやあ！」

抱きつこうとした俺の鳩尾に肘。どこで覚えたそんな技。

「護身用につて、部活の先生から」

む、無念……。

ファミレスつてのは、クリスマスになると家族とカップルしかないんだね。普段からそんな感じだけど、今日になると特に感じる。俺たちも今、この風景の一員なんだなーと。

「予算はあと一万と五千六百円でござあい。それ以内なら何頼んでも大丈夫」

「いや、割り勘でいいよ……」

うむ、確かに割り勘なら後腐れもないだろうな。なら、再び独り身隊の格言を引用するか。

「彼女に食事を奢るのは、男の嗜みなんだぜ？」

「そうなの？」

「そうなの」

納得いかないようだが渋々納得してもらう。しかし、一万くらいで間に合うのだろうか？ 主に詩織の胃袋が。

「……まあ、予算オーバーしたら考えなくもない」

「うん、わかった」

だからって無茶な注目はするなよな。

夕食は、まあ、はつきり言っただけ恋人たちの聖夜とはかけ離れてい
たと思う。食べたいだけ食べる目の前の柔道少女は、どうして太く
ならないのか不思議だ。いや、普通より少しふくよかだが、ピザと

かふとましいとかいう表現は合わない。

ああ、料理を運んできた店員の表情には苦笑いしかなかったな。俺の財布も細やかな銭しか残っていないし。

「なんか、ごめんね。ちよつと頼みすぎちゃったかも……」

「いや、気にしなくてもいいよ。ケチる男は彼女に愛想尽かされるっというし」

そうやって独り身隊に何度奢らされたことか。

「よし、金も尽きたことだし、そろそろムードに浸ろうか」

「なにそれ？」

「中央広場にでっかいクリスマスツリーがあるんだってさ」

さつきポスターに載ってたし。

「そこで恋人らしく、ベンチに二人寄り添ってツリーでも眺めようかと」

「……うん、いいね。そうしよっ」

こちらを見つめてくる詩織は、なんともうれしそうで。

「いやっほう！」

もう押さえ切れないうれしさが昇。拳となつて表れる。道行く人の中に『それ知ってるぜ』って反応があつたようななかつたような「ちよ、どうしたの?！」

詩織に心配された。おそらく脳みそのほうを。

「いや、ちよつとうれしさが爆発して」

そついうとうれしさが大半な複雑そうな表情をされた。

というわけで、ツリーを見上げられるベンチに二人並んで腰を下ろしたわけだけでも。座った瞬間、やなことを思い出した。

「あ、父さん母さんに連絡するの忘れてた」

「ええ?! 何やってんのよ早く電話電話!」

やべえ今ごろ心配になったお互いの両親が、ホテル経由で警察に連絡しているに違いない。ヤバイ。

番号入力、発信。ワンコール、ツーコール……。フォーコール半

で母親が出た。

「あ、母さん、ごめん連絡が遅れた」

「あら、ほんとに遅かったわね。あ、そこ、そこが気持ちいいです……」

寒気も来ますって。まさか電話で母親の艶のある声を聞かされるなんて、予想できる人間なんかいませんって。

「……何してんだよ」

「それはこっちのセリフだと思うんだけど……。足つばマッサージ。気持ちいいのよ」

息子が連絡もなしに失踪したつてのに、心配もせずに足つばマッサージで日頃の疲労を解消ですか。

「おばさんは？」

「詩織ちゃんのお母さんも一緒よ」

俺たちの両親って、一体……。

「ああ、今日、遅くなるんでしょう？ 十時までには帰ってきなさいよ」

しかもエスパー？！

「ちょ、なんで母さ」

「いいのよー。若いつていいわねー。じゃ」

プツン。ケータイ切れました。通信的な意味で。

啞然とする俺。両親のことで心配する詩織に、このことを告げる。

「あたしたちの両親って、一体……」

奇しくもそれは俺と一緒に感想。あとで母親にことの神髄を聞かねば。

まあ、なにはともあれ、親公認で十時まで二人つきりだ。こんなチャンス、二度とないだろう。

「なあ」

「ん？」

「肩に手乗せていい？」

怪訝な顔をされた。

「いちいち聞くことじゃないでしょ
そうか。そうなのか？」

とりあえず、そつと肩に手を置いた。この時に鳩尾にくるかとかビクビクしたのは、詩織には秘密だ。

肩を引き寄せると、詩織はもたれかかってきた。うわあ、幸せ…

…。

「実はさ、ずっと昔からこうしてみたかったんだ」

ツリーを見上げながらつぶやいてみた。

「へえ、結構普通だね」

少しむつとしそうな言い方だが、俺が変態だから仕方がない。つか普通とか言われたら変態の俺が叫ぶ。ダメだろこのままじゃ、と。

「そしておっぱいをこっ！？」

「黙れ」

まさかのゼロ距離ボディエルボー。こんな密着状態でも出せるのか。

暫く無言でムードに浸る。いや、俺が無言なのはやせ我慢してるからだけ。周りもカップルだらけなんだなーと、ツリーを見上げながら思う。

中央広場の時計が、八時半を告げている。それをちらりと確認した俺は、決意を新たにす。やるなら、今しかない！やるんだ俺！立ち上がれ！

突然立ち上がった俺に驚く詩織を、手を引いて立ち上がらせる。

「ちよつと、どうしたの急に？」

「あ、あのな、しお」

言い掛けて、突然の爆発音と喚声に声が途切れる。詩織と一緒に振り返ると、ツリーの向こう側に花火が見えた。

「あ、花火！行こ！」

「あ、ちよつ」

俺は詩織に手を引かれて、ツリーの反対側に回った。花火が、暗

い夜空に打ち上がる。詩織はうれしそうに見ているが、出鼻を挫かれた俺はなんと微妙な表情だろう。

少しの間、花火を見上げていた。花火が終わったと言おう。そう心に誓う。だがなかなか終わりが見えない。このまま時間が暮れば、非常に言いだしにくいな……。

とその時。ある一つの花火が上がった。空高くに打ち上がり、炸裂した。その形は、大きな球の中に小さな球が入っているものだ。それを見たとき、ふと懐かしい記憶がよみがえる。

あれは、初めて花火大会なるものを見に行った時のものだ。詩織の手を繋いで一緒に見上げている時に、その形の花火が上がった。

『あたし、あの形が一番好きだな』

『どうして？』

『だって、おもしろいじゃん！ 丸のなかに丸があるんだよ！』

俺にはそのおもしろさはよくわからなかったが、以来、詩織が好きなその形が、俺の好きな形になった。たぶん、その時にはもう惚れてたんだろうな。

それはまだ、第一回目の告白をする前の記憶だ。

「……あの形、好きだったよな」

「え？ あ、うん」

なんか、花火に勇気づけられたような気がする。気がするだけだけど。

俺は花火に夢中になってる詩織の肩をつかみ、強引にこっちに振り向かせた。

「ちよつと、今いいところ」

「受け取ってほしいものがある」

詩織の言葉をさえぎり、ポケットに手を突っ込む。すぐに触れたものを引っ張りだし、詩織に見せる。表は透明だから、中身が見える。

「これ、は？」

中身を見ながら詩織が尋ねる。俺は一旦深呼吸してから、深く息

を吸う。

「いつか、俺は立派な社会人になって東京のどっかの会社に就職しようと思う。それがいつかも、どの会社かも決めてないけれど、その時まで持っていてくれないか」

えっと、驚いた顔をあげる詩織。待て、次が一番恥ずかしくて一番驚くこと言うんだから。

「そして、いつかそうなった時に、これを返してもらう。代わりに、その、ゆ、指輪を渡すからさっ！ 婚約指輪っ！」

きつと今の俺は真っ赤になっている。ああ、昨日一生懸命練習した内容と違うこと言ってるよ。直接的すぎる。

これを聞いた詩織は、最初は理解できていないようだったが、火花が四発鳴ると、急に赤くなっていった。

「え、それって、ぶ、ぶろ……ぽー、ず」

「そのつもり、だ、けど……」

恥ずかしさが臨界点に達した。次五文字しゃべったら心臓が破裂するかもしれない。五歩歩いててもするかも。

「……変だよ。告白して、付き合うことになって、その二日目にプロポーズとか」

だよなあ。やっぱり、ダメか。

「……冗談なんでしょ？」

「……冗談でこんなことするかよ」

冗談で死のうとはしましたけど。

「……高校生のカップルって、うまくいかないもんだよ？」

「ある意味俺たちって、乳幼児のころから付き合ってるじゃん。いまさらうまくいかないとか、多分ない」

ないと思います。

「……なんで、あたし？」

「俺が好きなのは、いや……」

自分の頬を両手で張る。冷たいから凄く痛い。

「愛してるのは、今まで、今も、そしてこれから、詩織だけだ。」

絶対に」

嘘や飾りのない、素直な気持ち。これで断られたら、俺は一生独身確定だ。

「詩織には、断る権利はある。こんな俺のために一生を捧げる必要もないわけだしな」

誰かとくつつくのは、俺としては悔しいけれど。詩織が認めた相手ならいいかなと思う俺は、潔いのか甘いのか。

高校生が考えることじゃないのはわかってる。けれど、最後に言っておきたかった。この夜に。言わなきゃもう言えないような気がした。花火の音が、いやに耳に響いた。

詩織はうつむいて、俺の手に握られた箱に目を向けている。

「……絶対、来る？」

「絶対」

「……二十五までだからね」

「えっ？」

聞き返そうと思ったとき、手のなかから箱の感触が消えた。

「二十五歳までなら、預かっててあげるから」

顔を上げた詩織の顔は、かすかに幸せそうに微笑んでいた。その顔が、歪んでいく。やばい、なんかいろいろとやばい。

「ちよ、なんで泣くのよ?!」

「し、詩織い!」

抱きつく。抱き締める。今度は投げ飛ばされなかった。抱き締められる詩織は、最初は少し抵抗したが、諦めたのか理解したのか、抱き返してきた。

「絶対、行くから、返してもらうために」

「うん」

「二十五歳までには、絶対に」

「うん」

「それまで、ちゃんと待っててよ……」

「うん……」

今日は、本当、いいことなした。終始女々しかったのは俺のほうじゃないか。やっぱり、すべてにおいて詩織のほうが上なんだな。今回だって、計画じゃないで喜ぶのは詩織のほうだったはずなのに、でも、全部どうでもいい。結果的に、プロポーズには成功したわけだし。

体を少し放して、見つめ合う。

「キスしていい？」

「普通、聞く？」

詩織は目を瞑り、軽く顎を上げる。俺もそれに合わせて頭を傾け、ゆっくり近づいていく。

軽く触れるだけの、キスをした――

その後、花火終わってるじゃないかと詩織に文句を言われ、代わりに雀の涙ほどの金でアイスクリームを買われ、食べ終わった後時間を見たら九時半近くで時間がやべえ。走って帰るが十時二分過ぎ、母親からのスリーパーホールドの刑で花畑が見え掛け、父親からは四の字固めでタップ二千回して解放してもらった。

本当に、本当おーに災難な一日だった。それに見合うだけの、いや、お釣りすらきそうな幸せを手に入れたけれども。

今日はなんか疲れた。もう寝よう。不思議と、すぐに眠ることができた。

翌朝、飯の前に朝風呂に入ろうとしたら、部屋出た途端にばったりと詩織に出会った。

「おはよー」

「うん、はよー」

はよーって何だはよーって。略すなよ。

「朝風呂？ 男のくせに」

「いやー、男のくせには余計だろ。朝風呂だよ悪いか？」

「いや、別に」

なんなんだちくしょう！ くすくす笑う詩織の脇を過ぎて大浴場に向かおうとすると。

「……ねえ、昨日の話、本当？」

「ん？」

振り返ると、胸元を少し開いたセクシーな詩織がつ！ 危つく飛び掛かりそうになった俺を止めたのは、首から下がった一つのネックレス。小さなダイヤが中心に埋められた銀製の十字架。六万円ほど出して買った誓いのネックレスだ。

「……当たり前だろ。絶対、絶対返してもらっからな、それ」

「じゃ、今返そうか？」

「えっ?!」

俺、今、泣きそうです。吊ろうかと思っています。

「じよ、冗談よ冗談！ ちゃんと東京まで持っていくから」

「……タチ悪っ」

「いつかのお返しよ」

見つめ合う二人。途端に二人同時に吹き出す。

「んじゃ、朝飯にまた合おう。俺の隣はお前の特等席な」

「うん」

じゃっと軽く挨拶し、俺は大浴場へ向かう。幸せにだらけきった顔を引っ提げて。

それからは、特に大したことはしていない。恥ずかしさのピークは昨日で終えたから、今日からは普通に接することができる。

隣り合って朝ごはん。石鹸の匂いがすると言われて、そりやお前もだと笑い合った。

親にカンパしてもらい、二人で再びゲーセン。泣きを見たのはやはり俺。

二人で昼のツリーを見に行った。昼は昼でよく映えた。

そんな時間にも、終わりは訪れる。そろそろ帰る時間だ。なにか惜しい気もするが、後腐れはない。詩織が東京に飛び立つ日も、笑顔で見送れる気がする。

帰りの車も、互いにメールのやりとりで時間を潰した。たぶん、一生のうちに一番多くメールした二日間だろう。なんだか区切るのが惜しくて、無理矢理話題を探した。それは向こうも同じらしく、話題には互いに一貫性がなかった。

車が見慣れた街並みに入った。家はもうすぐだ。

『車降りたら、話したいことがある。ちょっと時間ちょうだい』
メールを打ち切ったときの、最後のメールの内容。話したいことって、何だ？

車を降りて一言。

「着いたー！」

これを言わなきゃ帰ってきた気がしない。とりあえず体を伸ばしながら詩織を待つ。来た。

「で、話したいことって何？」

体を伸ばしながら尋ねる。

「あのさ、浮気とかダメだから、あたし！」

「しねえよー」

「一週間に六日はメールしてね！」

「ほとんど毎日だよ」

「絶対だよ！」

「……絶対、な」

それにしてもなー。

「なんで今なんだよ。別に出発の時でもいいだろ？」

「ダメ！一回二回じゃ忘れるだろうから、出発まで毎日、いや、これから毎日言うの！」

「あっはっはっは。嬉しいこと言ってくれるねー」
小学生みたいだな。

「じゃ、また明日！」

そういつて、自分の荷物を持って家へと入っていく。また明日も会うのかと思っただが、俺も毎日でも会いたいと思う。

荷物を家に運び込んで、一息つく。お茶が美味え……。

隣の家から詩織の悲鳴が聞こえた気がしたが、ネズミでも出たのだろうか？

「案外うまくいったみたいねー」

隣に座った母親が一言。なにがうまくいったんだ？　そーいや聞きたいことがあったんだった。

「なあ、なんで俺たちが帰らないってわかったんだ？」

「いやあ、そうなるように仕組んだわけだしねえ」

……は？

「ちょ、何？」

「嘘なのよ」

「……何が？」

「いやな、いや、良い予感か？　がするんだが……？」

「詩織ちゃんのお父さんの転勤ね。あれ、私たちが考えた嘘なのよ」

「……はあああああああ！　なんですとぅ！？」

「いや、まて、はっ？！」

「あんたたち、両思いだったのになかなかくっつかないから、詩織ちゃんのお母さんと計画したのよ」

「それじゃあ、詩織の転校は……」

「嘘」

「俺の心配は……」

「取り越し苦労」

……生まれて初めて、親に殺意を抱いた瞬間だった。

「なんじゃそりゃあああああ！？」

隣から聞こえた気がした詩織の悲鳴は、これだったのか。絶叫だな。

「まあでも、これでやっとくっついたわけだし、結果オーライって

やつじゃない？」

こちら垣根で投身自殺まで謀りそうになったんだぞおい！？

ってことは、なにか。昨日のプロポーズ、かなりの外れなこと言
ったわけで。うっわ、恥ずかしい！　どんな顔して次に会えばいい
んだよ！　うーわー！

「なんてことしてくれたんだよクソババアああ！」

言ったら絞められた。ギブギブ、堕ちる墜ちる。

「まあ、いいじゃない。結果的にくっついたんだから」

「く……」

そこは否めない……。

でも、よかった。詩織は遠くには行かない。

確かに、母親の陰謀には腹はたつが、おかげで晴れて思いは通じ
合ったんだ。そこには感謝してる。

ありがとう、母さん。今までで最高のクリスマスプレゼントだっ
たよ。俺、絶対に詩織を幸せにするよ、うん。

詩織、愛してるよ――

後日。

「これ、やっぱり返すよ。東京、行かないし」

詩織が俺に突き出してくるネックレスを、俺は突き返す。

「ばーか、それは婚約指輪との交換だ。それ以外の返品は認めねー」

「……馬鹿」

そう言いつつも、ネックレスを大事そうに首に下げる。可愛い。

「詩織……」

思わず抱き締めると、抵抗して来なかった。
今日は一段と冷えるから、しばらくはこづいていようと思う。

（後書き）

時間が無い中急いだ上慣れない恋愛物だから、ボロボロな作品失礼しました。「俺」の名前が出ていないのは仕様です。酷評、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7754f/>

俺のクリスマス

2010年10月8日15時01分発行